

枚方教育

No. 1855
2021.3.11

枚方教職員組合
枚方市西禁野一丁目三
TEL 八四八三三〇〇
FAX 八四八三〇五二

市教委・新年度方針

小学校6時間授業日増、学テ自校採点

現場の負担軽減、持続可能な方策はどっち？

授業時数、自校採点、現場にのしかかる指示

市教委は2月26日の校長会で4月からの授業時数などについて、現時点で決まっていた方針を示しました。

これによると、原則修時間割を小3は週28時間、小4～6は週29時間＋クラブ・委員会となつていきます。

昨年度末に市教委が示していた方針では、小3～小6について年間10回、5時間授業日を6時間に設定するとしていたことからすると大きな方針転換となります。

また、新たにモジュール学習を授業時数に含めないとしています。

全国学テの自校採点についても、一律の実施を求めるものとなっております。

本来は、モジュール学習も含めて各学校で

文科省も、現行学習指導要領実施にあたり、授業時数の確保が大きな課題となることを認識して、前もって「カリキュラムマネジメント」としていくつ

かの例を示して、各学校で教育課程を編成することが重要とされていました。その中には、

- ①6時間授業日を増やす。モジュール学習の活用する。
- ②長期休業日の短縮・土曜授業の増加、
- ③①②を組み合わせて授業時数を確保する

の例を示し、それぞれ実施にあたっての条件整備も示して、各学校で検討して判断することとしていました。

文科省の検討会議の報告からしても、市教委の方針はかみ合っているとは言えません。

また、授業時数、教育課程編成についてのこの間の、文科省の通知からしても、市教委や学校での授業時数についての対応は、現場からも大きな疑問が残るものとなっております。

そもそも、大胆な負担軽減が必要

忘れてはならないことは、いずれの方策をとるにせよ、文科省はその前に学校業務、教職員負担の大胆な見直し・軽減こそ行った上でなければ、新しい学

新年度の取り組みについて(校長会より)

- ①原則 小3は週28時間、小4～6は週29時間＋クラブ・委員会
- ②モジュール学習は授業時数に含めることができない
- ③土曜授業 小学校は土日参観も含め年1回以上 中学校は市教委としては回数を規定しない
- ④全国学テ実施後に「自校採点」を行う

習指導要領の趣旨を実現することは難しいと強調し続けてきたことです。そのために、6年前の中教審答申やその後の幾度にもわたる働き方改革の通知が行われてきました。とりわけその中でも、「大胆な業務の見直し」教育委員会

文科省の授業時数・教育課程編制についての通知から

- 標準授業時数を大きく上回った授業時数を実施することは教師の負担増加に直結するものであることから、このような教育課程の編成・実施は行うべきではない。
- 災害や流行性疾患による学級閉鎖等の不測の事態により当該授業時数を下回った場合、下回ったことのみをもって学校教育法施行規則に反するとされるものではない
- 災害や流行性疾患による学級閉鎖等の不測の事態に備えることのみを過剰に意識して標準授業時数を大幅に上回って教育課程を編成する必要はない。
- 教育課程の編成・実施に当たって学校における働き方改革に配慮した対応を検討することが重要である。

の責務」を具体的に示して強調してきました。今のところ、市教委のイベント事業の大きな見直しが行われる様子は見られませんが、他市・他府県で行われている「働き方改革基本方針、基本計画」などまとまったものも示される様子もありません。

「もう、やっつけられない」中教審で現場教師の本音訴え

2年前にICT教育、小学校教科担任制などを論議していた中教審初等中等教育分科会での、現場の教職員の意見を代弁する校長の発言です。

学習指導要領の完全実施に向けた方策を話し合う場での、痛烈な意見として、参加者には重く受け止められていました。

しかし、その後の現場や教育委員会の対応には、この発言を十分生かしているとはいえないことも、現場の率直な実感です。

中教審・初等中等教育分科会(2019年10月4日) 西橋瑞穂委員(鹿児島県立甲南高校校長)の発言

- 「この審議会の議論は、もっともだと思ふ。でも、学校現場がどう考えるかを思うと、気が重くなってしまう。限られた時間しかないのに、学校に期待されていることが、あまりにも多すぎると感じるからだ」
- 「世の中が大きく変わっていて、教育も変わらないといけないことはよくわかる」
- 「新しいことを教師全員が理解するために研修が必要だ、という声が聞こえてくる。教師が勉強するのは当然だが、研修を増やすと言っても、それが簡単にできるのか」
- 「本当に時間的には一杯一杯なのに、(残業時間を減らす)働き方改革をやれ、と言われる。そこに新しいことをやらなければならない。現場では『言っていることと、やっていることが、全く違うじゃないか』と思っているのが現実だ」
- 「(文科省・委員会)もっと想像力を持って施策をやらないと、現場はついてこない。現場がついて行きたいと思っても、ついていけない。次から次に要求があり、そこに働き方改革と言われる。これでは『もう、やっつけられない』と、現場の教師は思ってしまう」